中道町埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

山梨県東八代郡中道町

立石遺跡

TATEISHI SITE

1993・3

中道町教育委員会
山梨県笛吹川沿岸土地改良事務所

序

山梨県東八代郡中道町は、古くから甲斐の交通の要衝であり、曽根丘陵を舞台に甲府盆地・南アルプスを遠望できる美しい自然と古墳群をはじめとする歴史の豊かなところであります。

また、立石遺跡周辺では、山梨県が整備をすすめております「山梨県甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」が隣接し、風土に恵まれた土地でもあります。

更に町では、21世紀に向けての施策として町内米倉山一帯を甲府地域テクノポリス構想の中で学術研究機関の設置予定地に考えており、現在着々と実現に向けて整備が進められております。

本報告書は、平成4年度県営畑地帯総合土地改良事業に伴って発掘調査された立石遺跡について、その成果をまとめたものであります。

立石遺跡は、従前の調査に加え、今回の調査によっても貴重な遺跡であることが再確認されました。

この報告書が今後の調和のとれた町民・県民の開発にも貢献することを祈るとともに、御協力を戴いた地権者、ならびに1月2月の寒い中を御協力いただいた関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

1993年3月

中道町教育委員会
教育長　小澤　義正

例　　言

1．本報告書は、平成４年度の山梨県営畑地帯総合土地改良事業（中道地区幹線第２号道路）に伴って発掘調査された山梨県東八代郡中道町立石遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、中道町教育委員会が山梨県からの補助を得て実施した。

3．発掘調査及び出土品の整理は、中道町教育委員会主事林部　光が担当した。

4．本報告書にかかわる編集・執筆・写真撮影は、林部が担当した。

5．本報告書にかかわる出土品及び記録図面・写真等は一括して中道町教育委員会に保管してある。

6．遺構及び遺物のトレースは宮川菊江・林部が行った。

7．出土品整理参加者

相田光枝・江川勝子・長田すみ子・小林敬子・斉藤多喜子・斉藤つね子・宮川菊江

（五十音順）

8．発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々からご教示・ご協力を戴いた。

記して感謝申し上げます。（敬称略）

小野正文・長沢宏昌（県教育委員会学術文化課）

森和敏・末木健・坂本美夫・保坂康夫・中山誠二（県埋蔵文化財センター）

伊藤修二（東八代郡八代町教育委員会）

岡野秀典（東八代郡豊富村教育委員会）

飯島　泉（塩山市教育委員会）

目　　次

序

例　言

第Ⅰ章　調　査　概　要 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1

第Ⅱ章　遺　跡　概　況 …… 2
　第１節　遺跡の位置と周辺の環境 …… 2
　第２節　調査区域の設定と調査方法 …… 2
　第３節　テストピットによる層序 …… 5

第Ⅲ章　遺　構　と　遺　物 …… 6
　第１節　土　　壙 …… 6
　第２節　出土遺物 …… 7

第Ⅳ章　ま　と　め …… 9

引用・参考文献

挿図目次

第１図　立石遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区域図 …… 4
第３図　層序 …… 5
第４図　１号土壙 …… 6
第５図　２号土壙 …… 6
第６図　遺構内出土遺物 …… 7
第７図　遺構外出土遺物 …… 7・8

図版目次

図版１　調査区近景（852－１）
図版２　調査区近景（843）
図版３　調査区近景（842）
図版４　調査区近景（800）
図版５　プレハブ設置状況
図版６　作業風景
図版７　１号土壙
図版８　２号土壙
図版９　TEST　PIT――８
図版10　TEST　PIT――２
図版11　TEST　PIT――10
図版12　TEST　PIT――15
図版13　出土遺物

第Ⅰ章　調査概要

第１節　調査に至る経過

平成４年12月３日　文化庁に発掘通知を提出する。

平成５年１月19日　山梨県笛吹川沿岸土地改良事務所・中道町教育委員会間で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結する。

平成５年１月20日　発掘調査を開始する。

平成５年２月16日　発掘調査を終了する。

平成５年２月22日　甲府南警察署に遺物の発見通知を提出する。

第２節　調査組織

調査主体　中道町教育委員会

調査組織　事務局　小澤　義正（教育長）

池谷　陸雄（教育課長）

酒井　春文（教育主幹）

担　当　林部　　光（社会教育係主事）

作業員　相田光枝・江川勝子・長田すみ子・小林敬子・斉藤多垚子・斉藤つね子

宮川菊江・宮川真由美・宮川誠子・渡辺鈴子

（五十音順・敬称略）

第II章　遺跡概況

第１節　遺跡の位置と周辺の環境

立石遺跡は、山梨県東八代郡中道町上向山地内に所在。甲府盆地南縁に東西15kmにわたって横たわり、多くの遺跡を載せる曽根丘陵の一角に位置。標高は325ｍ前後を測る。

過去幾多にわたり紹介されているとおり、本遺跡周辺では、先土器時代の遺物を豊富に出土させた立石遺跡、県内屈指の縄文•弥生大集落上の平遺跡、丘陵部に位置する上野原遺跡（縄文）・村上遺跡（縄文）・城越遺跡（縄文）などが知られている。

また、標高こそ異なるが、笛吹川付近には銚子塚古墳•丸山塚古墳などの大型古墳が群をなし、町全体が遺跡の集中地域として広く知られている。（第１図参照）

第２節　調査区域の設定と調査方法

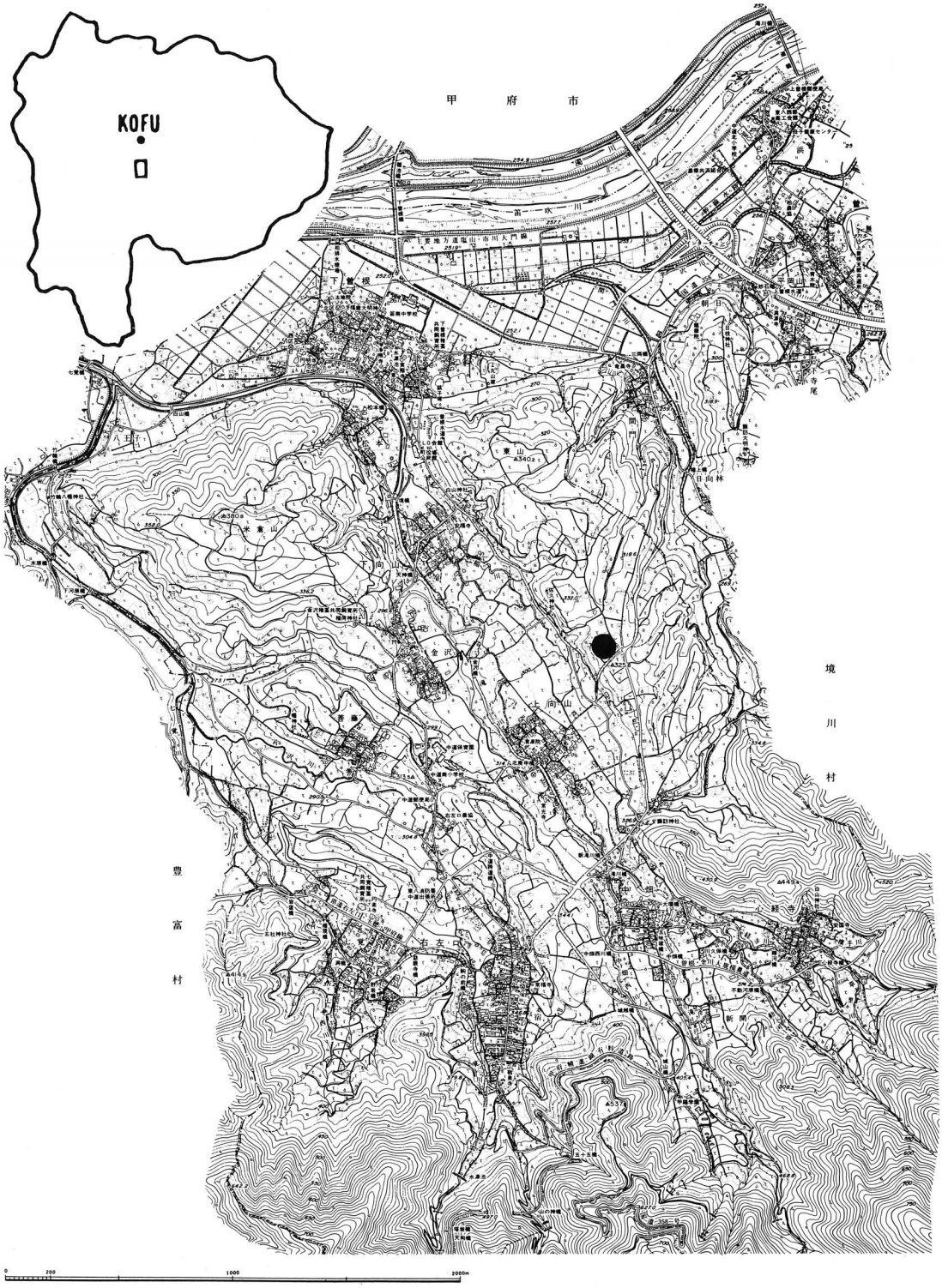
当事業は平成４年度から開始。中道町上向山字小林ノ上852番地１を最北端とし、南西に方向をとる土地改良事業である。

調査は事業区域内において周知の埋蔵文化財包蔵地を対象に実施。

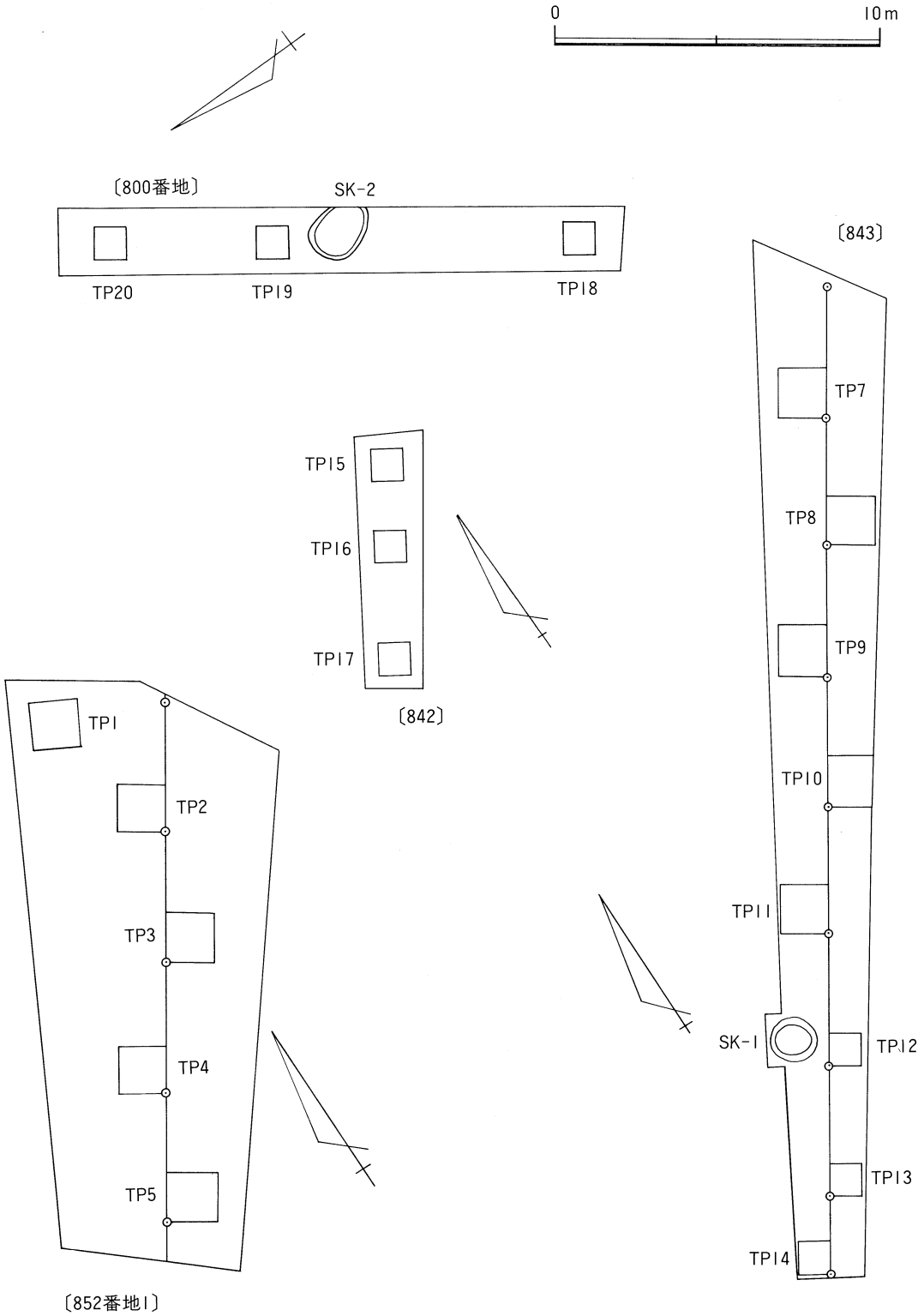
調査範囲が細長く、屈曲していることを考慮し、便宜上各調査区域を土地改良事業地の中心部に４ｍ間隔に杭を14本打ち、グリッドを設定。〔852－1•843番地〕　　他については、１畑１グリッドとして調査した。〔842・800番地〕

また、前述のとおり、本遺跡は先土器時代の遺跡としても認められているため、調査区域内に19ヶ所のテストピット（１ｍ×１ｍ×９ヶ所•1.5ｍ×1.5ｍ×10ヶ所）を設定。先土器時代の遺物確認調査を実施した。（第２図参照）

調査はまず対象地域全体の表土を削除し、遺構確認の整削を実施後、遺構の発掘を行った。



第１図　立石遺跡位置図


0
10m
〔800番地〕
SK-2
TP20
TP19
TP18
〔843〕
TP7
TP8
TP9
TP10
TP11
SK-1
TP12
TP13
TP14
TP15
TP16
TP17
〔842〕
TP1
TP2
TP3
TP4
TP5
〔852番地1〕

第２図　調査区域図

第3節　テストピットによる層序

前述のとおり19ヶ所のテストピットにより、先土器時代の遺物検出作業を実施した。

これらのピットをもとに基本的な層序を記す。

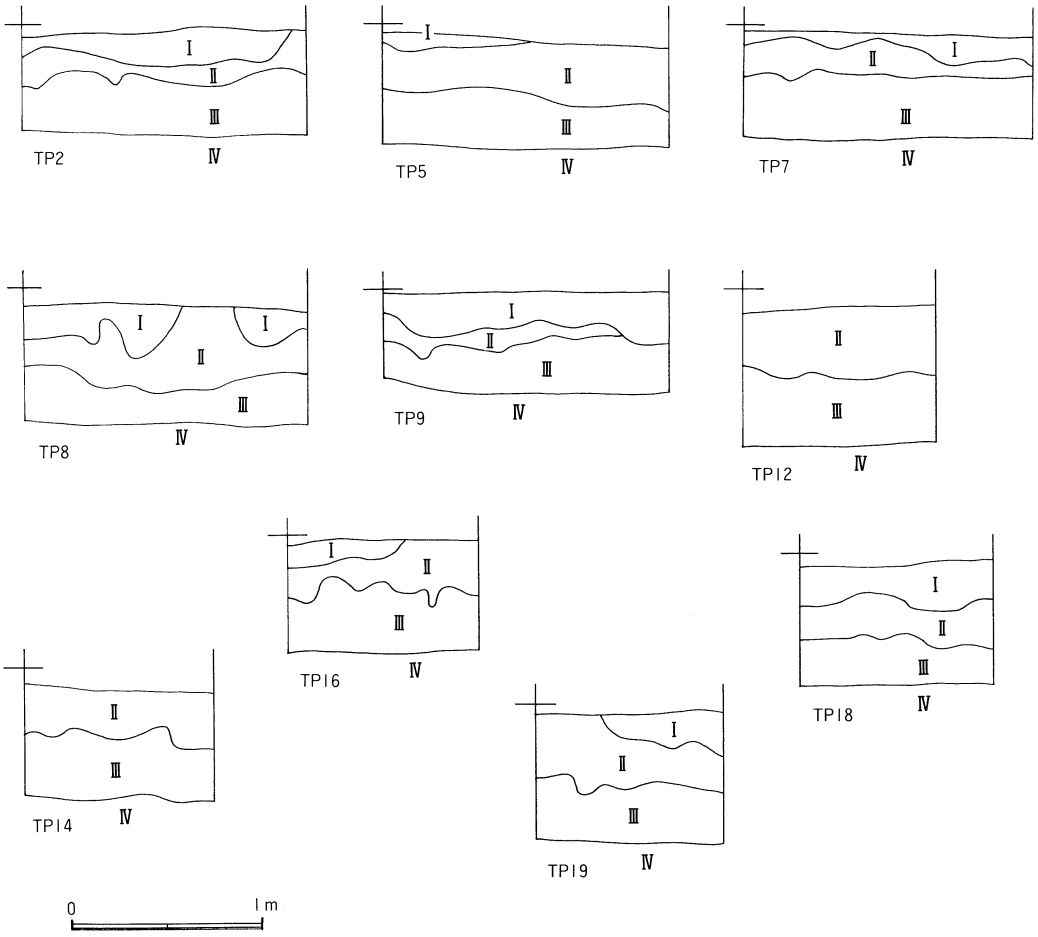
尚、以下の層は、縄文時代以降の基本的な遺構確認面である暗黄褐色ローム層上面をテストピットの上面としてある。

第Ⅰ層：撹乱層。そのほとんどが暗褐色を呈す。これらほとんどが農耕によるものであり、調査区域全体で著しい撹乱を受けている。

第Ⅱ層：暗黄褐色ローム層。第Ⅳ層のローム層と比較し、やや軟弱である。

第Ⅲ層：黒褐色土層。

第Ⅳ層：黄褐色ローム層。粘性・しまりが強い。



第3図　層序

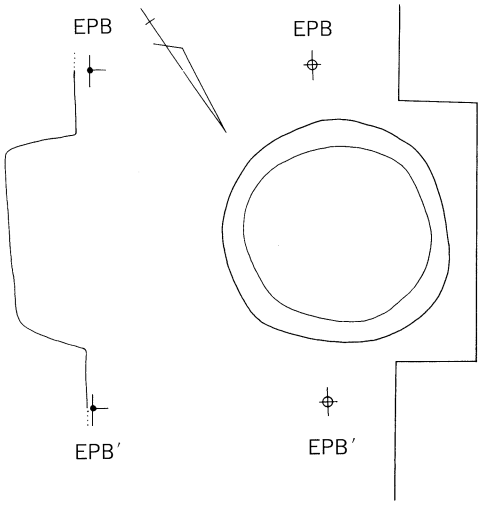
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　土　壙

本調査で検出された遺構は土壙２基である。

１号土壙

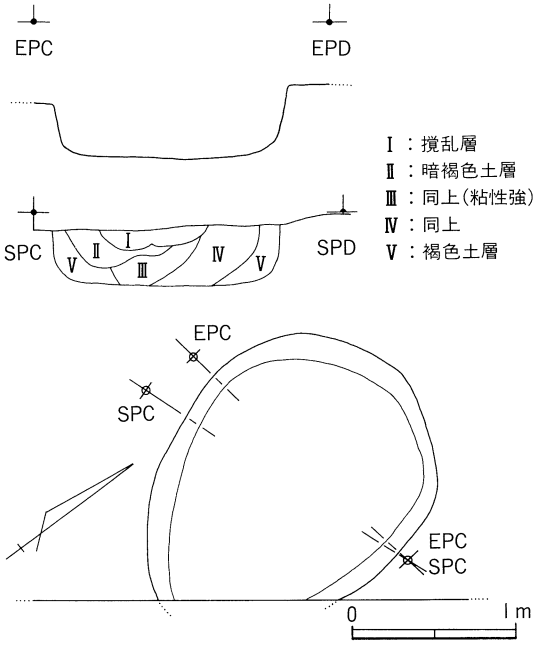
位　置　　テストピット12に隣接
形　態　　平面――正円形　断面――鍋底状
規　模　　径130cm　深さ45cm
壙　底　　平坦
時　期　　縄文時代中期初頭・五領ヶ台式
出土遺物　当時期の土器が若干量出土したが載せるべきものは、土器２点、磨石１点のみである。



第４図　１号土壙

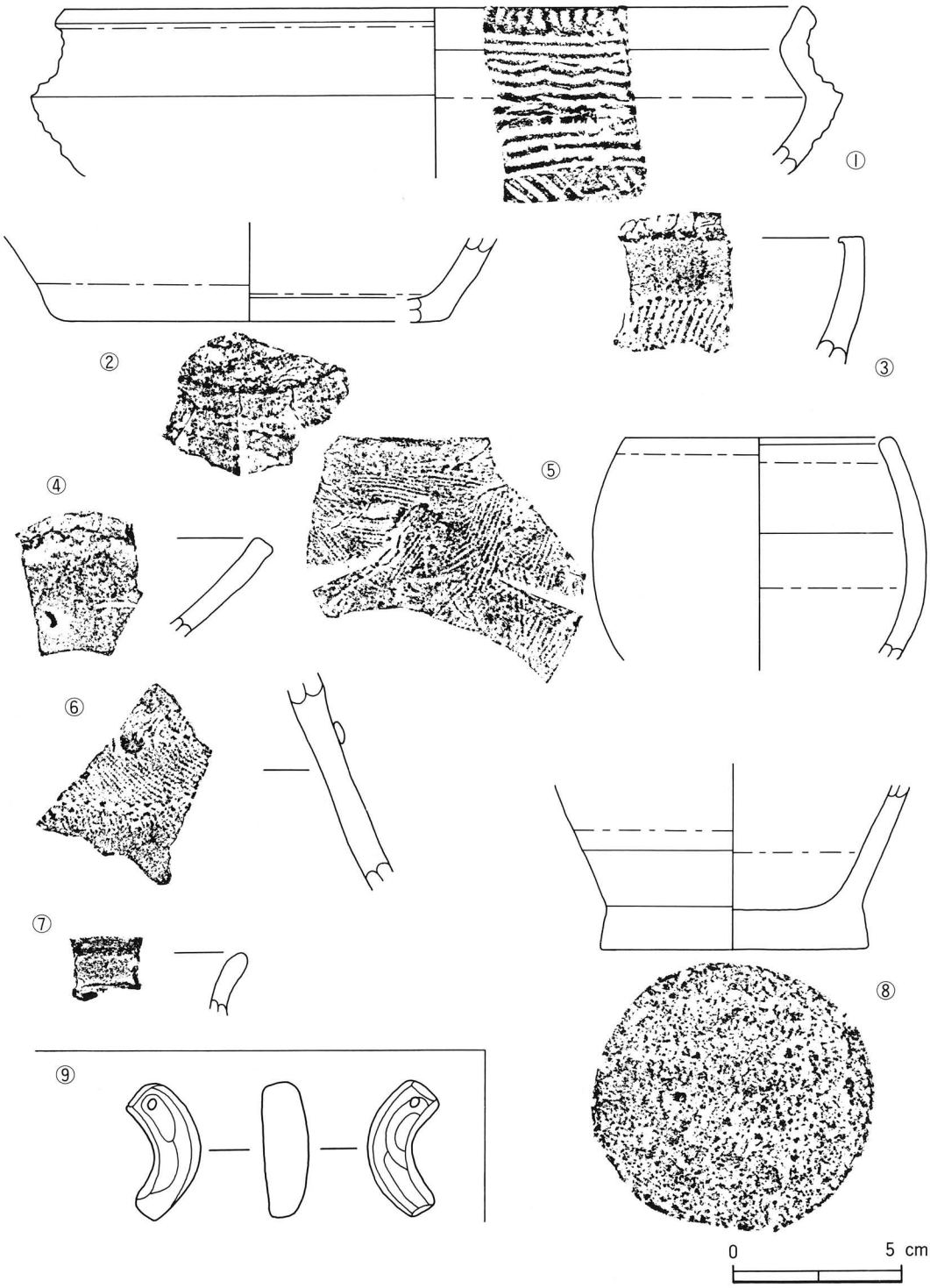
２号土壙

位　置　　テストピット19付近
形　態　　平面――不整楕円形　断面――鍋底状
規　模　　長軸――推定200cm　短軸―150cm　深さ――50cm
壙　底　　平坦
時　期　　弥生時代終末期
出土遺物　ボタン状貼付文を付加された土器片が数点出土している。

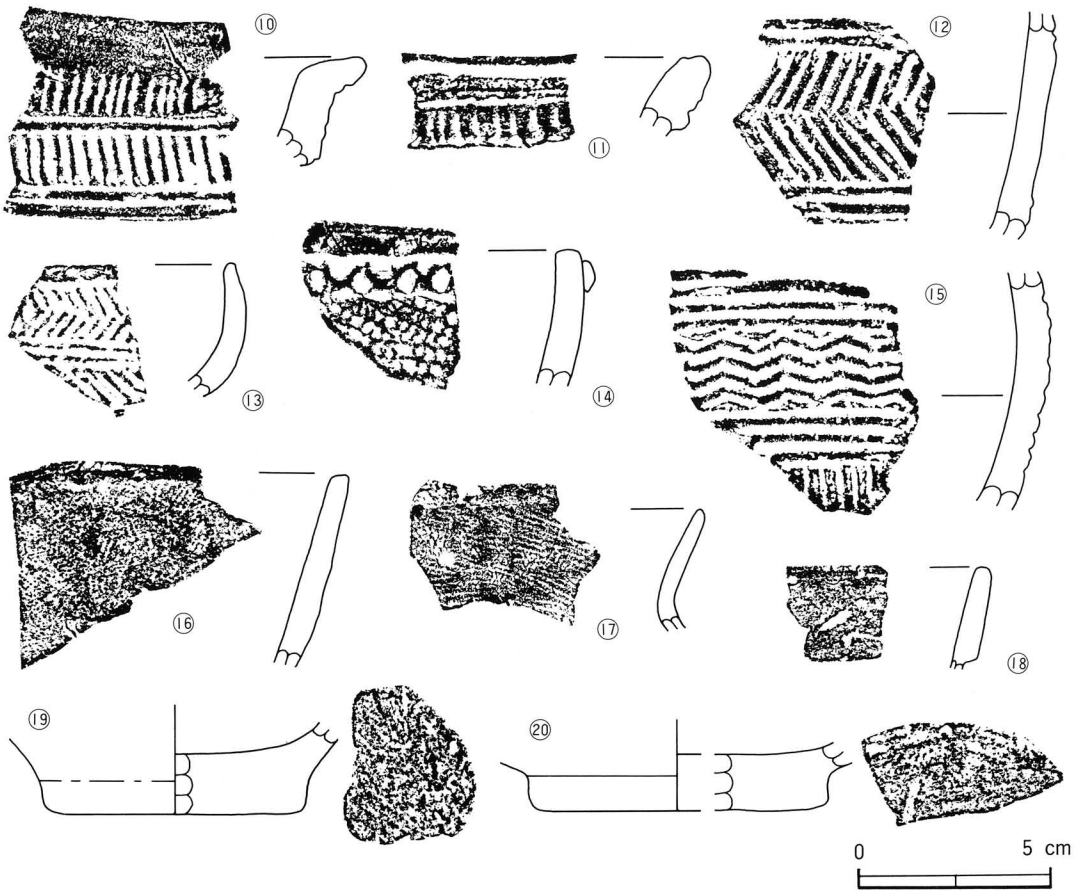


第５図　２号土壙

第2節　出土遺物



第6図　遺構内出土遺物



第７図　遺構外出土遺物

No.	出土地点	器 形	法　量	調　　整	No.	出土地点	器 形	法　量	調　整
1	１号土壙	深鉢	推口220㎜	内面にナデ	11	852―１	甕	推口220㎜	
2	１号土壙	甕	推底120㎜		12	852―１	深鉢		
3	１号土壙	浅鉢	推口200㎜		13	852―１	小型壺	推口110㎜	
4	２号土壙	甕	推口220㎜		14	852―１	深鉢	推口190㎜	
5	２号土壙	埦	推口 80㎜		15	852―１	深鉢		
6	２号土壙	壺		ボタン状突起	16	852―１	甕	推口200㎜	内外面にハケ
7	２号土壙	壺			17	852―１	甕	推口170㎜	内外面にハケ
8	２号土壙	甕	底径 80㎜	内外面にハケ目	18	800	甕	推口100㎜	
9	852―１	勾玉	縦41・横13㎜	緻密なミガキ、ケズリ	19	852―１	壺	推底 70㎜	
10	852―１	深鉢	推口230㎜		20	852―１	壺	推底 80㎜	外面にクシ

第Ⅳ章　ま　と　め

今回の調査は、面積が狭かったものの極端に細長い調査地であったため、あたかも立石遺跡の南側半分にトレンチによる試掘調査を実施したかのような発掘調査であった。

先土器時代遺産検出を目的としたテストピットを19ケ所設定したが、今回の調査では遺物・遺構ともに確認されなかった。

縄文時代としては、中期初頭五領ヶ台式期の土壙が１基確認された。しかし、遺構外からは十三菩提式・藤内式・曽利式期の土器が同時に検出されていることから、周囲からはこれらの時期に伴う遺構が今後の調査で検出される可能性があると思われる。

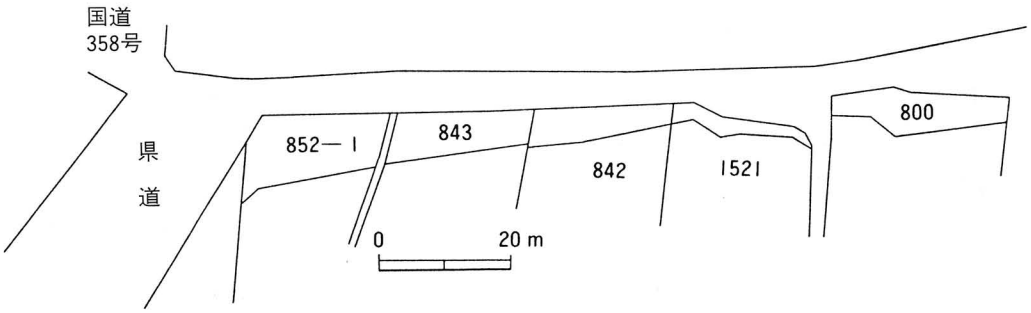
弥生時代としては、終末期の遺物を伴出させた土壙が１基確認された。分布状況から判断してもこの時期の遺物が比較的多く認められるため、立石遺跡は、この時期の集落が全盛期ではなかったかと想像される。

このように今回の調査では狭い範囲にかかわらず縄文時代から弥生時代にかけての遺物・遺構が検出され、山梨県を代表する遺跡――立石――の偉大さを再認識することができた。

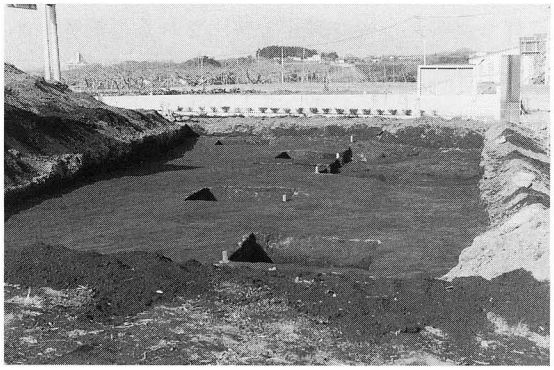
今後周囲の「線」としてではなく、「面」としての調査に期待する。

引用・参考文献

山梨県教育委員会　『上の平遺跡――第４次・第５次発掘調査報告書』（1987）
山梨県教育委員会　『上の平遺跡――第１・２・３次調査』（1991）

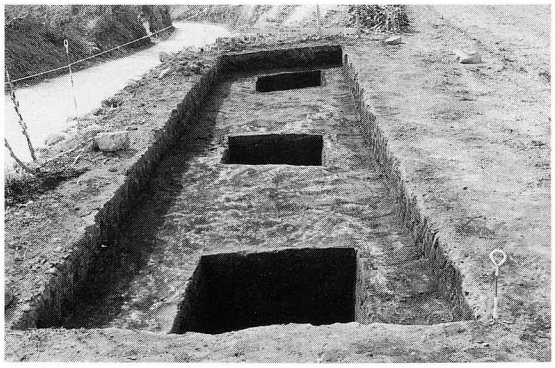


附図　事業平面図

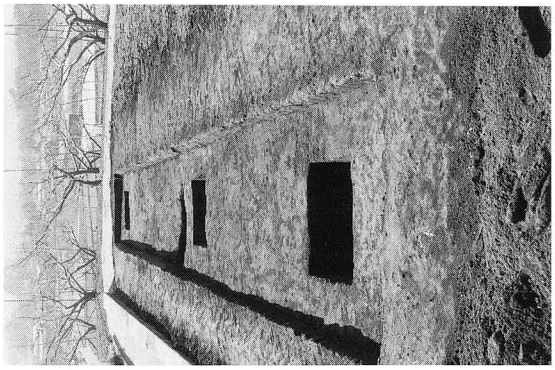


図版 1　調査区近景
852—1　南西→北東

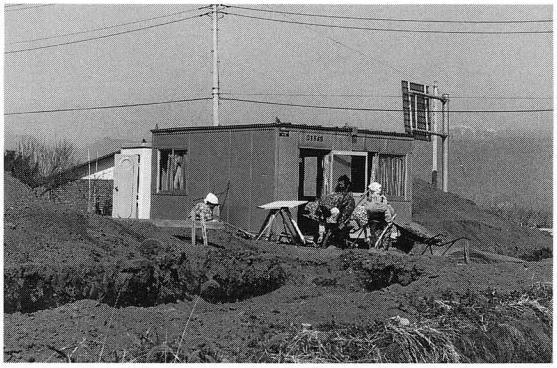
図版 2　調査区近景
843　北東→南西



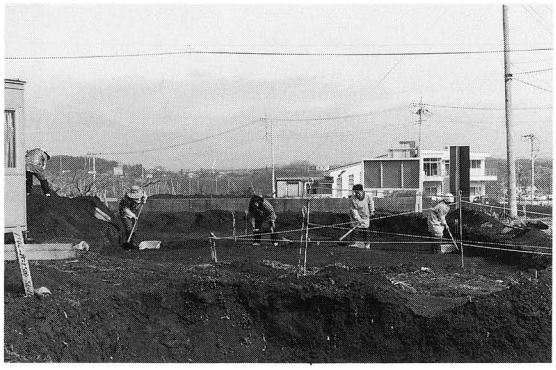
図版 3　調査区近景
842　北東→南西



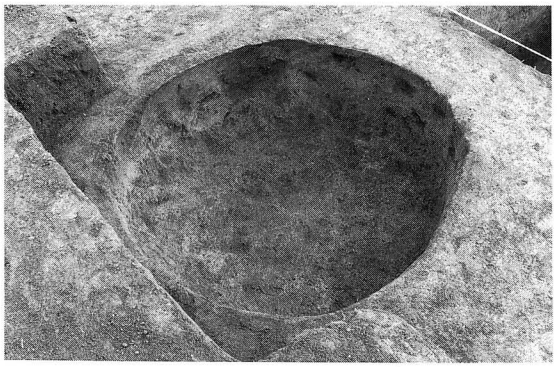
図版 4　調査区近景
800　北東→南西



図版 5　プレハブ設置状況

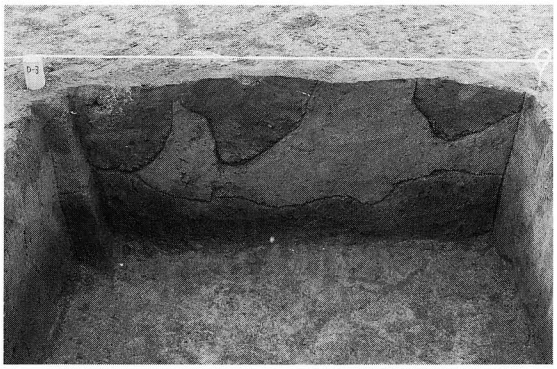


図版 6　作業風景

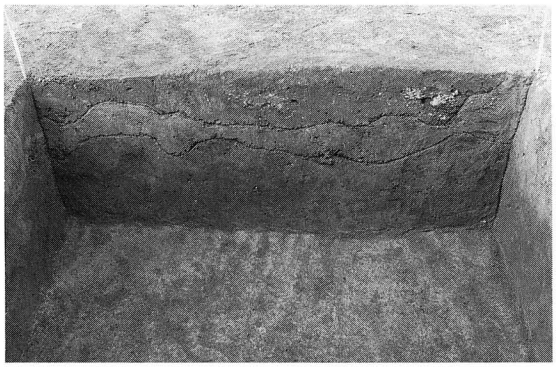


図版７　１号土壙

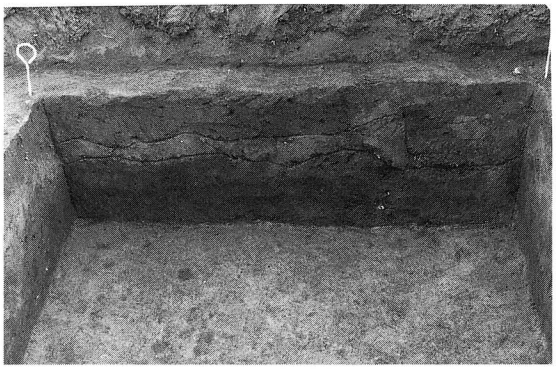
図版８　２号土壙



図版９　TEST　PIT ８

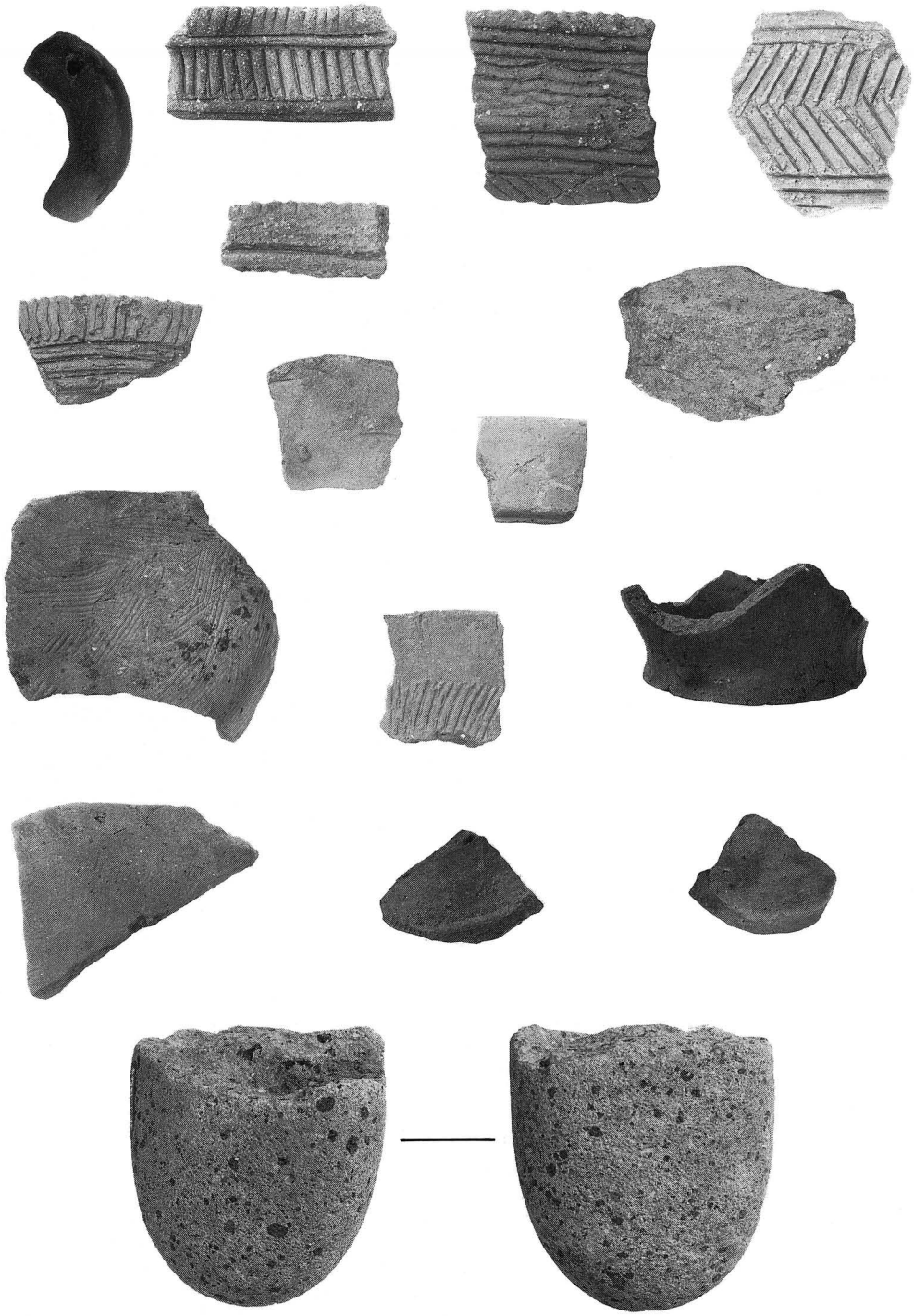


図版10　TEST　PIT 2



図版11　TEST　PIT10

図版12　TEST　PIT15



図版13　出土遺物

中道町埋蔵文化財発掘調査報告書　第２集

平成５年３月25日印刷
平成５年３月31日発行

立 石 遺 跡

発　行　中道町教育委員会
山梨県八代郡中道町下向山1524
印　刷　デザインオフィス WITH